厚真町

鯉沼３遺跡

－農地造成に伴う工事立会調査報告書－

厚真町教育委員会

平成１７年３月

例　言

1　本書は有限会社新興産業が行う農地造成に伴い、北海道教育委員会・厚真町教育委員会が平成16年度に実施した工事立会調査報告書である。
2　本書の編集は北海道教育委員会文化課の藤原秀樹、厚真町教育委員会の奈良智法が担当した。
3　本書の執筆はⅠ－２を藤原・奈良が、Ⅰ－１・３・５、Ⅱ－１・２・４(1)、Ⅲを藤原が、Ⅰ－４、Ⅱ－３・４(2)を奈良が担当した。
4　遺物の整理は厚真町教育委員会が行った。
5　出土資料および記録類は厚真町教育委員会が保管する。
6　調査に当たっては下記の諸機関および諸氏にご協力・ご指導を頂いた。
有限会社新興産業高橋利光、財団法人北海道埋蔵文化財センター、花岡正光、佐藤剛、大泰司統

目　次

Ⅰ．調査の概要
1　調査要項・調査体制 …… 1
2　調査に至る経緯 …… 1
3　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 1
4　調査範囲と調査の方法 …… 2
5　層序 …… 5
Ⅱ．遺構と遺物
1　Ｔピット …… 5
2　焼土 …… 5
3　フレイク・チップ集中 …… 5
4　遺物
(1)土器 …… 11
(2)石器 …… 14
Ⅲ．まとめ …… 17
表 …… 19
写真図版 …… 21
参考文献 …… 27
報告書抄録 …… 28

Ⅰ　調査の概要

1　調査要項・調査体制

事 業 名：農地造成
事 業 者：有限会社新興産業
工事期間：平成15年12月20日～平成18年12月31日
遺 跡 名：鯉沼3遺跡（北海道教育委員会登載番号 J-11-85）
所 在 地：勇払郡厚真町字鯉沼108番地1・4
調査面積：1857㎡
調査期間：平成16年7月12日～7月16日
調査体制：厚真町教育委員会　教育長　　幅田敏夫
　　同　　生涯学習課長　長橋政徳
　　同　　遺跡発掘調査員　奈良智法
　　北海道教育庁生涯学習部文化課　藤原秀樹
調査協力：有限会社新興産業、厚真町教育委員会　乾　哲也、同　小野　哲也

2　調査に至る経緯

有限会社新興産業は厚真町鯉沼108番地で火山灰採取・農地造成を計画したところ、造成面積が1haを越えることから、胆振支庁の指導により平成15年12月1日付けで北海道教育委員会に埋蔵文化財保護のための事前協議がなされた。これを受けて、北海道教育委員会により平成16年4月14・15日および6月10・11日に試掘調査が実施された。その結果、平成16年4月27日付け教文第4054号および6月15日付け教文第4204号で、遺構・遺物ともに多く検出された区域は保存、Tピットおよび若干の遺物が検出された区域は工事立会を要する旨、回答された。

なお、今回調査区域にかかる文化財保護法第57条の2の届出は平成16年5月21日付けで道教委あてに提出され、平成16年5月25日付け教文第3039号で工事立会が必要な旨が通知された。

今回調査区域は、事前協議提出以前に土砂採取により大部分が漸移層およびローム層まで削平されていた区域、およびそれに隣接した区域である。削平されていた区域では、農地造成時に使用するため黒色土が山積みにされており、そこには相当数の遺物が存在していたので、黒色土を重機により移動したうえで遺物回収を行った。その後、遺構を確認・調査するための工事立会を実施した。

遺物回収は有限会社新興産業の協力を得て、遺構確認に先立つ5月に厚真町教育委員会が実施した。この結果、土器93点・石器62点の合計155点を採取した。

また、遺構確認調査は、有限会社新興産業による重機・作業員の提供を受けて、平成16年7月12～16日の5日間の日程で北海道教育委員会・厚真町教育委員会が実施した。この結果、Tピット7基、焼土1ヶ所、フレイク・チップ集中1ヶ所が検出された。また、一部残存していた包含層から土器58点・石器4431点の合計4489点が出土した（表2・3）。

3　遺跡の位置と周辺の遺跡

鯉沼3遺跡は厚真町市街地から南へ10kmほど離れた舌状台地上に位置している（図1）。標高は14～18mである。浜厚真、厚和、鯉沼にかけては厚真川・野安部川・入鹿部川に挟まれた標高7～9mほどの農地・沼地に囲まれて、標高20～23mの台地が広がり、台地縁辺部は複雑に入り組んでいる。こ

の台地は支笏降下火山灰（Spfa-1）から成る火山灰台地である（道埋文　2002）。

鯉沼３遺跡周辺の低地は現在では農地となっているが、1921年大日本帝国陸地測量部発行の「鵡川」を見ると当時は沼地・湿地であった事が分かる。また、平成16年６月に実施した台地下の試掘調査でも泥炭が厚く堆積していることが確認でき、しばしば湧水も見られた。現在では大沼・長沼その他数ヵ所の湖沼が存在しているだけであるが、縄文海進時には汀線が遺跡近くまで迫り、また遺跡が形成された縄文時代中期頃には広大な沼地・湿地に囲まれていたことが推測できる。

この低地もしくは沼地に延びる舌状台地上には鯉沼４遺跡、厚和５・８・９遺跡、鹿沼３・５遺跡、浜厚真４遺跡などが確認されている。これらは火山灰採取・土砂採取などの開発行為によって確認されたものである。そのため、この周辺には樽前山の火山灰によって厚く覆われ未確認なまま、多数の埋蔵文化財包蔵地が存在していることが推測される。

4　調査範囲と調査の方法

今回調査範囲は土砂採取により包含層が漸移層もしくはローム層まで削平されていた区域、およびその北側で試掘調査の結果、黒色土が残存するものの遺物が出土しなかった区域である（図２）。調査範囲の南側・西側は既にローム層下位および支笏降下火山灰(Spfa-1)まで深く掘削を受けていた。この部分では黒色土の落ち込みも確認できなかった。調査範囲東側は別事業者による事前協議を受けて、平成16年６月に道教委による試掘が実施されたが、遺構・遺物とも確認できなかった区域である。また、北側は試掘調査により遺構・遺物とも確認されたため要保存とした区域である。

削平区域での調査はまず重機により山積みされていた黒色土を除去し、残存している漸移層もしくはローム層上まで掘り下げた。その後、スコップ・ジョレンを用いて清掃し、黒色土の落ち込みを精査した。その結果、Ｔピット３基、焼土１ヶ所、フレイク・チップ集中１ヶ所が確認された。Ｔピットの内１基（ＴＰ－３）は要保存区域に伸びていたため、立会調査区域内の調査に止めた。また、漸移層から出土した遺物についてはトータルステーションを用いて位置を記録して取り上げた。

黒色土が残存する区域では重機により20mおきに幅5mのトレンチを８本開削し、ローム層まで掘り下げた。次に、黒色土の落ち込みが見られた部分および沢地形部分を適宜拡張した。この結果、Ｔピットを４基確認した。

遺構の平面実測にはトータルステーションを用いた。土層断面図およびエレーベーション図は調査担当者が現地で図面を作成した。また、必要に応じて写真撮影を行った。

調査区の座標の位置は厚真町厚和地区に設けられている３級基準点の中から、鯉沼３遺跡立会区域に近い２点の公共座票 H15-02(X＝－151731.552、Y＝－29644.690、Z＝18.823m)と H15-03(X＝－151825.353、Y＝－29913.319、Z＝16.649m)を使用した。座標の算出は遺跡管理システムを用いてトータルステーションで２点を測距しパソコン上で計算した。これら２点の公共座標杭から調査区に６本任意の杭を設定し、遺構・地形に合わせて使用した。任意で設定した杭の座標（平面直角座標第ＸⅡ系、日本測地系）の内、２点は以下の通りである。

A-1　X＝－151681.565　Y＝－29720.799　Z＝17.089m

A-2　X＝－151676.753　Y＝－29704.856　Z＝16.771m

また、上記の座標値から 10m×10mのグリッドを設定した（図３）。この内、調査区内にある座標は以下のとおりである。

F-3　X＝－151670.000　Y＝－29730.000　　E-5　X＝－151660.000　Y＝－29710.000

G-6　X＝－151680.000　Y＝－29700.000　　D-8　X＝－151650.000　Y＝－29680.000

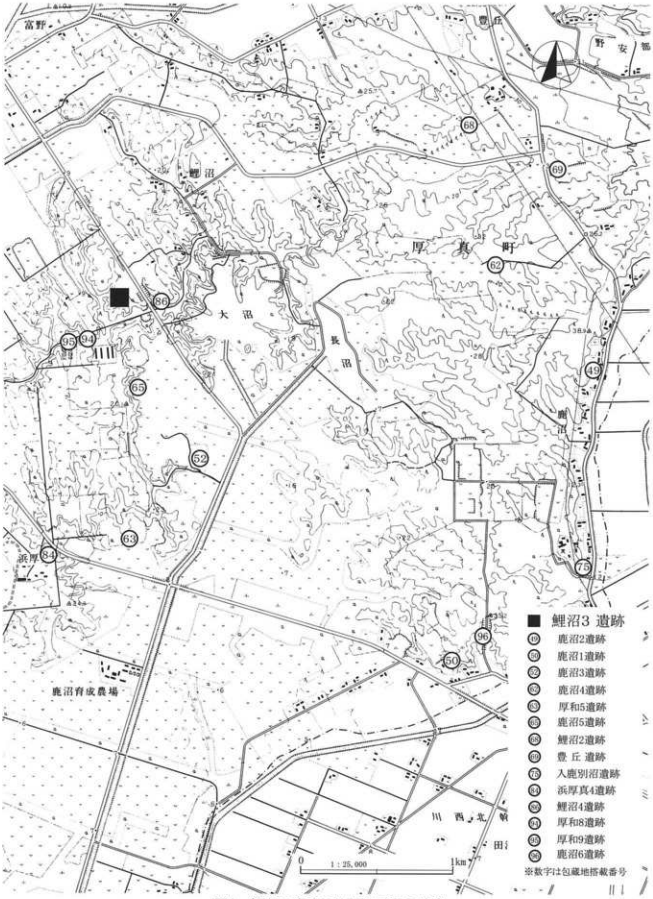


図1　鯉沼３遺跡の位置と周辺の遺跡

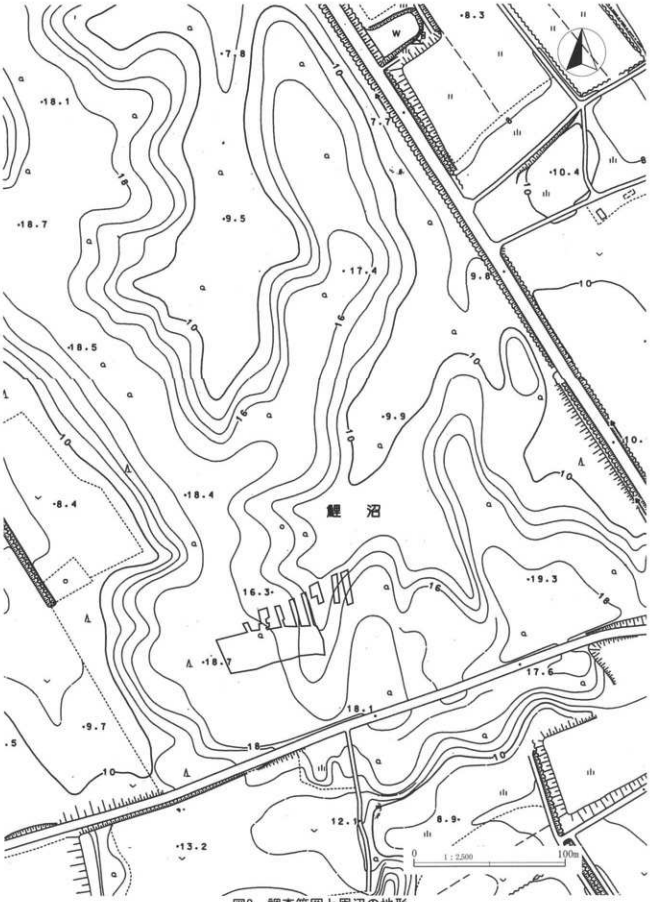


図2　調査範囲と周辺の地形

5　層序

Ⅰ層：表土で厚さは10cm程である。

Ⅱ層：樽前山降下火山灰で、Ta-b（1667年降下）に相当する。厚さは70～80cmである。

Ⅲ層：第1黒色土層で厚さは10cm程である。この層の上位には苫小牧－白頭山火山灰（B-Tm）が認められる。

Ⅳ層：樽前山降下火山灰で、Ta-cに相当する。厚さは10cm程である。

Ⅴ層：第2黒色土層で厚さは10～30cm程である。なお、沢地形部分では厚く堆積していたが、主に尾根部分を中心に黒味が弱く黒褐色から暗褐色で下位のⅥ層と分別不可能な箇所がみられた。Ｔピットはこの層の中位から掘り込まれており、試掘調査で掘り上げ土が確認された箇所もある。

Ⅵ層：漸移層で厚さは5～10cmである。この層には少量の樽前山降下火山灰(Ta-d)が混じっている。

Ⅶ層：いわゆるソフトロームである。尾根上ではこの層が欠落する部分もある。

Ⅷ層：風成堆積と推測される支笏降下火山灰(Spfa-1)である。

Ⅱ　遺構と遺物

1　Ｔピット（図4～7、表4、図版2・3）

今回の工事立会調査ではＴピットが7基検出された（図3）。

これらのＴピットは調査区内にある3ヶ所の沢地形部分に確認され、この沢地形毎にＴＰ－1・2・3、ＴＰ－4・5、ＴＰ－6・7の大きく3つのまとまりに分かれている。いずれも切り合いは無く、長軸方向も規則性は見られない。形態は全て溝状で、壌底面に杭穴が確認されたものも無い。今回検出されたＴピットを下記のいわゆる苫小牧分類（大泉、苫埋文1987）にあてはめると

Ａ型：長短比が8以上で、長さに比べて幅が狭い溝状のタイプ。

　Ａ1型　長軸が2m以上の物　　Ａ2型　長軸が2m未満のもの

Ｂ型：長短比が4以上、8未満のもので、長楕円形のタイプ。

　Ｂ1型　杭穴がないもの　　Ｂ2型　杭穴があるもの

Ｃ型：長短比が4未満のもので、楕円形から円形に近いもの。

Ｄ型：長さ1m、幅0．2m前後の小規模なタイプで、深さ0．5m未満のもの。

ＴＰ－1・2・4・5・7がＡ1型、ＴＰ－6がＡ2型に相当する。一部のみの調査であるＴＰ－3はその規模からＡ1型に相当すると推測される。円形～長楕円形のＢ・Ｃ・Ｄ型のものは無い。

なお、ＴＰ－3ではⅤ層上面から約10cm下位が掘り込み面であった。出土遺物が無く、構築時期は判然としないが、掘り込み面から本遺跡の主体である縄文時代中期後半から後期初頭と推測される。

2　焼土（図7、表5、図版4）

焼土は1ヶ所が検出された。Ⅵ層で確認され、上位が土砂採取により削平されている。薄く不明瞭な焼土で、近くにある木根攪乱の影響を受けている。明確な時期は不明であるが、周辺出土の遺物から縄文時代中期後半、柏木川式のものと推測できる。

3　フレイク・チップ集中（図3、表6、図版6）

フレイク・チップ集中は1ヶ所が検出された。Ⅵ層で確認され、上位は土砂採取によって削平されている。木根による攪乱を受けていると判断し、中心部の位置のみを記録した。出土点数は4371点で総重量124.31gである。全て黒曜石で、肉眼観察では赤井川産と思われる。時期は不明である。

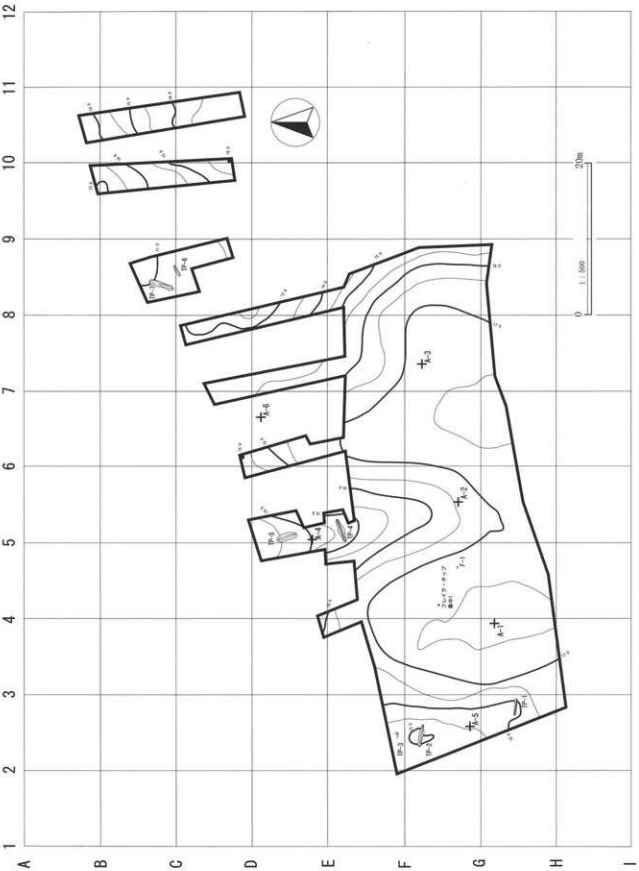
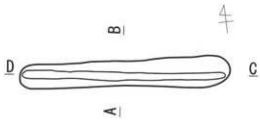
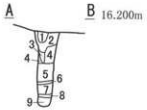


図3　遺構配置図

TP-1

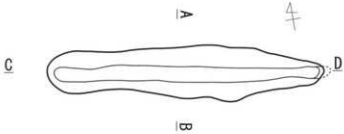


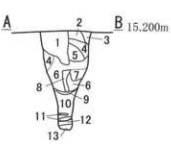


TP−1

1	10YR3/4	暗褐色土	しまり強。汚れたローム。
2	10YR2/2	黒褐色土	汚れたローム＋黒色土。パミス少量混。
3	7.5YR2/1	黒色土	しまり弱。パミス均一に混。
4	10YR4/6	褐色土	粘性強。ローム主体に黒色土少量均一に混。
5	10YR4/6	褐色土	しまり弱。4層とほぼ同質＋パミス少量混。
6	10YR2/1	黒色土	粘性強。
7	10YR4/6	褐色土	粘性強。
8	7.5YR5/8	明褐色土	しまり弱。パミス。
9	10YR3/1	黒褐色土	パミス少量混。

TP-2





TP−2

1	7.5YR2/1	黒色土	しまり弱。粘性強く、パミス少量混。
2	10YR2/2	黒褐色土	しまり強。パミス混。
3	10YR3/3	暗褐色土	しまり弱。黒色土+パミス+ロームが斑状に混。
4	10YR3/4	暗褐色土	しまり強。粘性弱。パミス多く混。
5	10YR4/4	褐色土	しまり強。粘性強。
6	10YR4/6	褐色土	しまり弱。粘性強。パミス少量混。
7	10YR3/1	黒褐色土	ローム+黒色土粒にパミス極少量混。
8	10YR2/1	黒色土	しまり弱。粘性強。
9	10YR1.7/1	黒色土	しまり弱。粘性強。パミス少量混。
10	7.5YR5/6	明褐色土	しまり弱。パミス多量に混。
11	7.5YR2/1	黒色土	しまり弱。粘性強。10層下位に見られる互層堆積
12	10YR5/6	黄褐色土	しまり弱。
13	7.5YR3/1	黒褐色土	しまり弱。粘性強。ローム少量混。

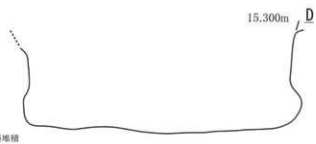
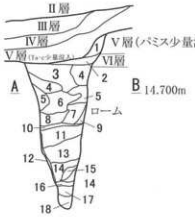


図4　Tピット(1)

TP-3



TP－3

1	7.5YR1.7/1	黒色土	しまり弱。粘性強。パミス少量混。
2	10YR2/2	黒褐色土	しまり弱。粘性弱。パミス多量に混。
3	10YR1.7/1	黒色土	しまり弱。粘性強。パミス少量斑状に混。
4	10YR2/2	黒褐色土	しまり弱。粘性強。パミス+ローム。
5	10YR4/6	褐色土	パミス少量混。
6	10YR3/1	黒褐色土	粘性弱。粘性強。ローム+黒色土。 一部に黒色土の互層堆積が認められる。
7	7.5YR4/4	褐色土	しまり弱。粘性強。黒色土斑状に混。
8	10YR5/6	明褐色土	黒色土少量混。
9	10YR5/6	明褐色土	ローム。
10	10YR3/2	黒褐色土	しまり強。粘性強。
11	10YR5/6	明褐色土	一部に黒色土ブロック混。
12	10YR2/1	黒色土	粘性強い。
13	10YR5/6	明褐色土	ローム。
14	10YR4/6	褐色土	しまり弱。粘性弱。ローム+パミス。
15	10YR4/4	褐色土	ローム。
16	10YR1.7/1	黒色土	しまり弱。粘性強。
17	7.5YR5/8	明褐色土	しまり弱。粘性弱。
18	10YR1.7/1	黒色土	しまり弱。粘性強。パミス多量に混。

TP-4

TP－4

1	7.5YR1.7/1	黒色土	しまり弱。極少量のローム混。
2	10YR2/2	黒褐色土	しまり弱。少量のローム混。
3	10YR3/4	暗褐色土	しまり強。ローム+パミス。
4	10YR2/1	黒色土	しまり弱。ロームブロック。
5	10YR3/3	暗褐色土	しまり強。黒色土+ローム。
6	10YR3/4	暗褐色土	しまり弱。ボソボソ。ローム+パミス。
7	10YR4/4	褐色土	しまり弱。ボソボソ。ローム+パミス。
8	10YR4/6	褐色土	しまり弱。ボソボソ。
9	10YR1.7/1	黒色土	しまり弱。
10	10YR4/4	褐色土	しまり弱。ボソボソ。ロームにパミスが混。
11	10YR1.7/1	黒色土	しまり弱。パミス混。
12	10YR5/4	にぶい黄褐色土	しまり弱。パミス。

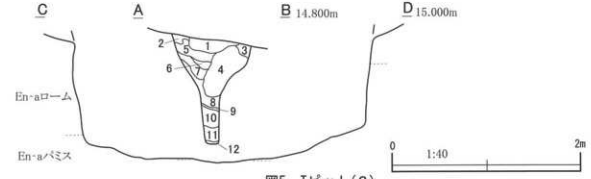
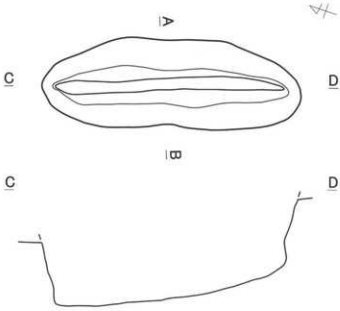
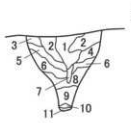


図5　Tピット(2)

TP-5

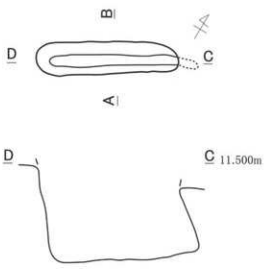


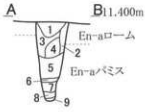


TP−5

1	7.5YR1.7/1	黒色土	しまり強。少量のローム混。
2	7.5YR2/2	黒褐色土	しまり強。パミスが少量混。
3	7.5YR3/4	暗褐色土	しまり弱。ボソボソ。
4	10YR3/4	暗褐色土	しまり弱。ボソボソ。
5	10YR3/3	暗褐色土	しまり弱。ボソボソ。
6	10YR4/3	にぶい黄褐色土	しまり弱。パミスが混。
7	10YR2/2	黒褐色土	しまり弱。黒色土+ローム。
8	10YR4/4	褐色土	しまり弱。ローム+パミス。
9	10YR2/2	黒褐色土	しまり弱。少量のローム混。
10	10YR3/3	褐色土	しまり弱。ローム+パミス。
11	10YR2/1	黒色土	しまり弱。

TP-6



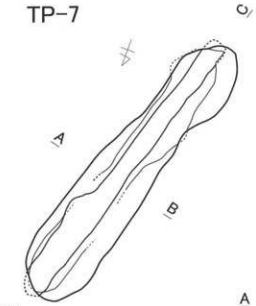


TP−6

1	10YR1.7/1	黒色土	しまり弱。粘性強。パミス少量混。
2	10YR4/4	褐色土	しまり弱。粘性強。黒色土にパミス少量混。
3	7.5YR3/1	黒褐色土	しまり弱。粘性強。パミスに黒色土少量混。
4	10YR2/2	黒褐色土	しまり弱。粘性強。パミス+黒色土斑状に混。
5	10YR4/6	褐色土	しまり弱。粘性強。パミス。
6	10YR1.7/1	黒色土	しまり弱。粘性強。
7	10YR3/3	暗褐色土	黒色土+パミス。
8	10YR5/6	明褐色土	しまり弱。粘性強。パミス。
9	10YR1.7/1	黒色土	しまり弱。粘性強。パミス少量混。

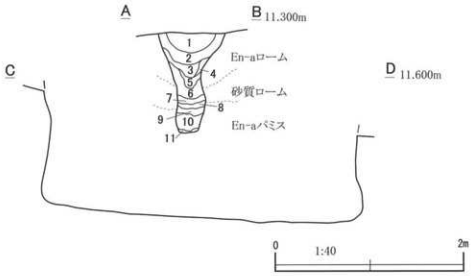
図6　Tピット(3)

TP−7

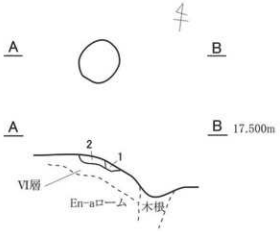


TP−7

1	10YR1.7/1	黒色土	しまり弱。Ta-d が極少量混。
2	10YR2/1	黒色土	しまり弱。極少量のローム混。
3	10YR2/3	黒褐色土	しまり弱。黒色土＋ローム・パミス。
4	10YR4/4	褐色土	ボソボソ。極少量の黒色土混。
5	10YR4/6	褐色土＋10YR2/1	黒色土　しまり弱。ブロック状に黒色土混。
6	10YR4/6	褐色土	しまり弱。ボソボソのローム。
7	10YR1.7/1	黒色土	しまり弱。ボソボソのローム。
8	10YR4/4	褐色土	しまり弱。ボソボソのローム
9	10YR2/2	黒褐色土	しまり弱。極少量のローム混。
10	10YR3/4	暗褐色土	しまりやや強。少量のローム・パミス混。
11	10YR2/1	黒色土	しまり弱。



F−1



F−1

1	5YR2/4	極暗赤褐色土	しまり弱。焼土。
2	5YR2/2	黒褐色土	しまり弱。少量の焼土粒が混。

図7　Tピット(4)・焼土

4　遺物

今回の工事立会調査で出土・回収した遺物は土器151点、石器4493点の合計4644点である。4月の試掘調査時および5月の遺物回収時のものは土器93点・石器62点、7月の工事立会調査時のものは土器58点・石器4431点である。なお、7月出土の石器4431点のうちフレイク・チップ集中から出土したものは4371点で、98.6%を占める。

(1)土器（図8・9、表7、図版5）

今回出土・回収した土器のうち、工事立会時の58点は全てV層からの出土である。残り93点は削平され山積みされていた黒色土中から回収したもので、本来的包含層は今回調査区の南側および西側に隣接したV層であったと推測される。

土器の内訳は縄文時代早期後半の東釧路Ⅳ式1点、前期前半の綱文式3点、前期前半に属するもの1点、中期後半の柏木川式117点、後期初頭の余市式29点である。中期後半の柏木川式が主体で、全体の77%を占めている。

ここでは、口縁部・胴部・底部のうち、比較的残存状況が良好で特徴を良く示しているもの 33 点を図示した。

1は東釧路Ⅳ式である。底部に近い破片と推測され、2条並列する撚糸文と縄端圧痕文が施されたもの。胎土には少量の繊維が入っている。東釧路Ⅳ式のなかでは新しいものに位置付けられる。

2は綱文式である。組紐回転文が施文され、内面は比較的平滑に調整されている。3は型式名が不明であるが、前期前半に属するものと推測される。原体の繊維が粗いＬＲ、もしくは複節ＬＲＬの縄文が施文されている。いずれも厚手で胎土には繊維が多く入っている。

4～28は柏木川式である。平縁もしくは小突起があるものは4ヶ所で、口縁部が外反し、頸部がすぼまり、胴部が膨らみ、底部にかけてすぼまる器形である。口唇部直下あるいは肩部に横走する縄線文もしくは縦に縄端が押捺された貼付帯が巡るものが多い。また、小突起から垂直もしくは「∩」状に垂下する貼付帯が施されるものもある。地文は比較的整った斜行縄文が多く、横走気味や結束第1種のもの、綾線文を施したものもある。胎土には砂や少量の繊維が入っているものが多い。

4～10は口縁部もしくはその同一個体の破片で、貼付帯で文様が構成されるもの。

4・5は貼付帯と押引文との組み合わせになるもの。4は口唇部直下と胴部に横走し、更に突起部から垂下する貼付帯もあるが、胴部および垂下する貼付帯は剥離している。口唇部直下の貼付帯上には地文と同じ原体を用いた縄線文が施文され、口縁部の貼付帯間には幅1cmほどの箆状工具による2列の押引文が施文されている。5は小突起から「∩」状に垂下する貼付帯が施されるもので、貼付帯上には縄端が押捺されている。口縁部断面形は角形に近く、口唇部直下と肩部に幅0.5cmほどの箆状工具による2列の押引文が施文されている。

6～8は貼付帯上に地文と同一原体による縄線文が施文されたもの。6・7は同一個体で、口唇部直下と肩部に貼付帯が巡るもの。8は口縁部断面形が角形に近いもの。9は折り返し口縁状の貼付帯があり、口唇部に縄端が押捺されたもの。10は器面の多くが剥離しているが、頸部からやや下がった肩部に貼付帯が巡っていたことが確認できる。

11～23は胴部破片である。11～15は貼付帯で文様が構成されるもの。11は縄線文との組み合わせになるもの。縄線文は地文と同一原体で、地文施文後の口縁部付近および貼付帯上に押捺されている。12は押引文との組み合わせになるもの。地文は不明瞭であるが、地文施文後に丸棒状工具による押引文が施されていると思われる。肩部の貼付帯上には縄端が押捺されている。13は貼付帯上に縄線文が、14・15は縄端が押捺されているもの。いずれも、地文の斜行縄文と同一原体である。

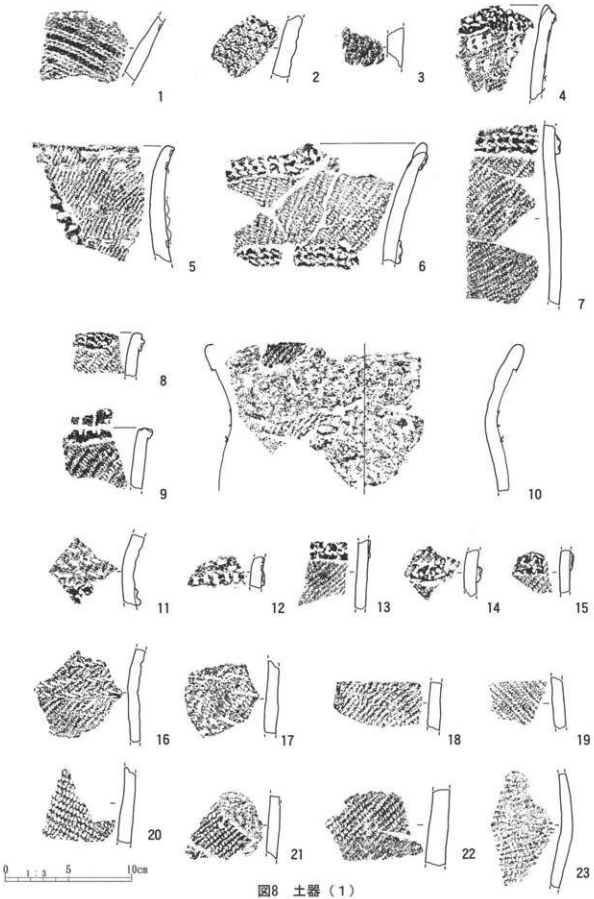


図8　土器（1）

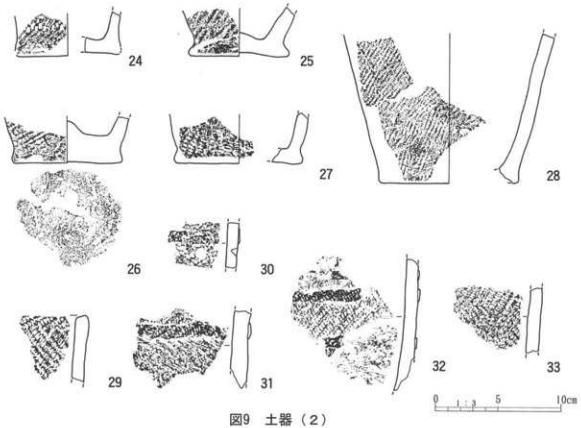


図9　土器（２）

16はくびれた頸部の破片で、縄線文で文様が構成されるもの。内面には横走する調整痕が顕著に見られる。17は地文施文後に綾繰文が施されたもの。18～23は地文の縄文のみが施文された胴部破片である。18は結束第１種の縄文が施文されたもの。斜行縄文と推測され、24の底部と同一個体の可能性がある。19～22は比較的整った斜行縄文が、23は横走気味縄文の施文されている。22は比較的厚手で胎土には砂が多く入っている。

24～28は柏木川式の底部である。24～27は底面近くが外側に張り出しているもの。24は結束第１種斜行縄文が施文されたもの。25～28は底部近くに地文の斜行縄文のみが見えるもの。26は内面の底部中央を山状に盛り上げている。27は０段多条の原体を用いて施文したもの。28は底部近くの張り出しが弱いもの。焼成が良好で、内面には篦状工具を用いた横方向の調整痕が明瞭に見られる。

29～33は余市式である。貼付帯が胴部に巡るものがあり、厚手で胎土には砂が多く混じっている。器壁に直角気味の突瘤文が施されたロ縁部破片が１点確認できたが、器表面の剥離が著しく、今回は図示出来なかった。貼付帯があるものは、地文施文後に貼付帯を巡らせ、貼付帯上に更に縄文を施文している。

29は口縁部がやや肥厚するもので、撚りの異なる原体を用いた羽状縄文を施文している。口縁部断面形は角形に近く、口唇部は平坦に調整されている。煉瓦台式に近縁のもので、今回出土した余市式の中では最も古手に位置付けられる 30～32は貼付帯の見られる胴部破片。30は補修孔が途中まで穿孔されたもの。31は貼付帯をはさんで、斜行縄文と反撚りの縄文が施文されたもの。32は少なくとも３条の貼付帯が確認できるもので、上下の貼付帯上には地文と異なる撚りの、中位には地文と同じ撚りの斜行縄文が施文されている。33は地文の縄文のみが見られる胴部破片で、撚りの異なる原体を用いた羽状縄文が施文されている。

(2)石器（図10・11、表8、図版4・6）

今回出土・回収された石器の総数は4439点である。このうち剥片石器は石鏃1点、Rフレイク6点、Uフレイク3点の合計10点、フレイク・チップがフレイク・チップ集中出土のものも含め4437点である。礫石器は石斧6点、敲石8点、擦り石1点、砥石4点の合計19点、礫が27点である。本遺跡出土の剥片石器の石材はフレイク・チップも含め全て黒曜石製である。礫石器の石材は緑色泥岩（Gr-Mud）が全体の53%を占め、次に凝灰質砂岩（Tu-Sa）21%、片麻岩（Gni）11%、砂岩（Sa）11%、片岩（Sch）4%と続く。また、礫を含めても緑色泥岩が全体の37%と遺跡内に持ち込まれる頻度が高いことが指摘できる。

ここでは分類ごとに特徴のある石器11点を図示した。以下に分類ごとの特徴を述べる。

石鏃（図10－1）

石鏃は1点出土した。有茎の石鏃で明瞭な基部をもつ。尖頭部が一部欠損し基部は尖る。剥離は裏面から細かな調整がなされ、全体的に被熱している。所属時期は表採のため明確ではないが、形態から本遺跡の主体時期である縄文中期後半と思われる。

石斧（図10－2～4）

石斧は6点出土し、このうち3点を図示した。刃部の作出状況により完成品・未成品に分類した。

(1) 完成品

2は基部を欠損している両刃の磨製石斧である。乳棒状で厚みがあり、両刃が丁寧に研磨されている。刃部には一部剥離が見られる。また、欠損した基部の破断面に剥離が見られることから、欠損後も使用していたと思われる。所属時期は不明。

(2) 未成品

3・4は緑色泥岩製の石斧未成品である。形状は両方とも短冊状である。3は断面カマボコ状で研磨と敲打を繰り返して整形している。表裏面とも敲打後に研磨調整を行なっているが、刃部と基部付近には研磨後に剥離しているヶ所も認められる。また、左側縁はよく研磨されているが右側縁は敲打調整のみである。4は厚みがありほぼ全面研磨され裏面に若干自然面を残すのみである。下端部周縁の全周に剥離と一部敲打痕が認められるため、刃部再生途中もしくは敲石としての転用が考えられる。所属時期は不明。

敲石（図10－5～8）

敲石は8点出土し、このうち4点を図示した。5は楕円形状の扁平礫を素材としたもので、両側縁に敲打痕が認められるが、特に右側縁は顕著である。6は球形もしくは楕円状のやや厚みのある扁平礫で大半を欠損している。敲打痕は側縁に認められる。表面には黒色付着物が認められ、全体的に被熱するが破断面には殆んど認められない。側縁の剥落とひび割れは被熱による影響と思われる。7・8は楕円状の扁平礫を素材としたもので、7は両側縁と裏面の上半部に敲打痕が認められる。敲打は右側縁の方が顕著であるが、被熱による焼け弾けによって敲打面が切られていることから被熱後は使用していないと考えられる。8は下部を欠損している。両側縁に敲打痕が認められるが、左側縁は敲打によって大きく剥離面が形成されている。所属時期は不明。

擦り石（図11－9）

擦り石は1点出土した。断面が逆三角形状の礫を素材とし、稜を使用している。両端を欠損しているが一端は破断面に剥離が顕著であり、擦痕が剥離面に及んでいることから欠損後も使用していたと考えられる。また、一部に薄く煤痕が認められ全体的に被熱している。所属時期は表採のため明確ではないが、形態から縄文早期～縄文前期のものと思われる。

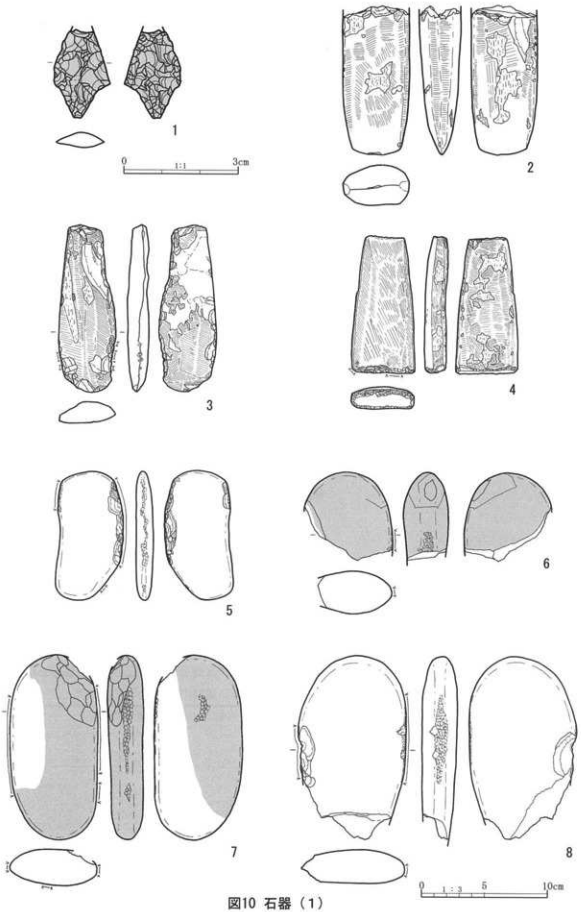


図10 石器（1）

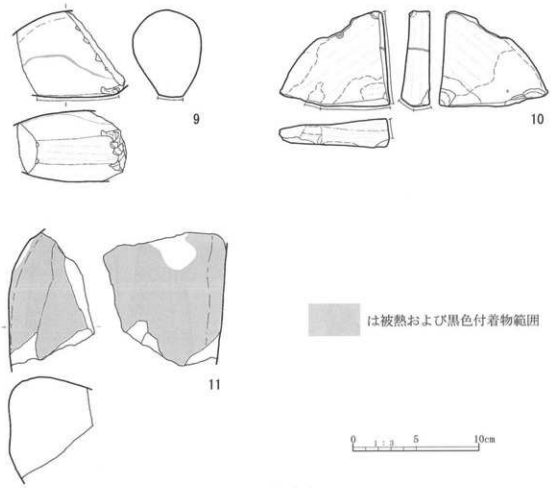


図11 石器（2）

砥石（図11－10）

砥石は4点出土し石材は全て凝灰質砂岩である。このうち1点を図示した。10は板状礫を素材として、両面及び2側縁を使用している。両面とも使用面は平坦で擦り面はほぼ一定方向である。右側縁は若干内湾し、下側縁は擦り面が2面認められ断面に丸みを帯びることから手持ち砥石としての使用が考えられる。所属時期は不明。

付着物が認められる礫（図11－11）

礫は27点出土し、このうち1点を図示した。大型の礫で大部分を欠損している。破断面以外の表面には黒色付着物が認められる。使用痕は認められないが、遺跡内で焼土やフレイク・チップ集中が確認されていることから、これらに関連する遺物と考えられる。所属時期は不明。

Ⅲ まとめ

本遺跡では台地上の沢地形部分にＴピットがまとまることが明らかになった。同じような分布を示す近接した遺跡に厚真７遺跡（苫埋文 1987）や鯉沼２遺跡（厚真町教委 2001）が挙げられる。Ｔピットの構築時期については具体的な確証は無いものの、本遺跡の主体的な時期である縄文時代中期後半から後期初頭を大きく外れないものと推測される。なお、隣接するＴピットに規模や長軸方向の類似性が見られないことから、構築時期に若干の差があると考えられ、結果として沢地形部分にまとまったものと思われる。

Ｔピットは主に鹿を捕らえる重力罠であると考えられている。鹿は「長く追われると必ず谷から川に入ってゆく。水をよく泳ぎ、海岸では海に飛び込んで泳ぐことも珍しくない。」という（千葉 1975）。本遺跡もこのような習性を熟知していた縄文人が効率的に鹿を追い込み、捕えるために沢地形部分にＴピットを構築したものであろう。

このようなＴピットは厚真町およびその周辺において特に多く検出されることが分かってきている。そこで周辺町村で検出されたＴピットをまとめたものが表１である。

厚真町に隣接する早来町では苫小牧東部工業地帯に位置する遠浅１遺跡から検出されたものが最初である（苫埋文 1987）。その後、大町２遺跡で４基（道埋文 2005）、試掘調査であるが富岡３遺跡で１基が検出された。また、安平Ａ遺跡で３号墳とされたものは杭のあるＣ型のＴピットであろう。他に「棒状溝」と呼称されたものも３つあり、おそらく溝状のＡ型Ｔピットと思われるが、図面が無く詳細は不明である（早来町教委 1976）。このように、早来町では安平川流域の内陸部でもＴピットが検出されることが明らかになりつつある。

苫小牧市では新千歳空港周辺の遺跡群および苫小牧東部工業地帯に分布する遺跡群から数多くのＴピットが検出されている。最も多く検出された遺跡は、空港周辺では美沢 11 遺跡の 63 基（道埋文 1988、苫埋文 1993）、苫東地区では静川 14 遺跡の 120 基（苫埋文 2002ａ）である。これら最近の調査例だけでも検出総数は 624 基余りに及ぶ。苫小牧市では海岸近くの台地上、およびやや内陸部で千歳市との境界近くの河川に面した台地上に多く検出されていることが分かる。

鵡川町では多くが日高自動車道路に伴う発掘調査により発見されたものである。そのため、ほとんどが海岸に近い台地上から検出されており、宮戸４遺跡の 53 基（道埋文 2002・2003a・2004）が最も多い。

厚真町では苫小牧東部工業地帯に位置する厚真１遺跡・厚真２遺跡から検出されたものが最初である。最も多く検出されたのは浜厚真３遺跡の 187 基で（道埋文 2003b・04）、厚幌１遺跡の 95 基（厚真町教委 2004）、厚真７遺跡の 79 基が続く。厚真町では浜厚真３遺跡・厚真７遺跡や本遺跡のように海岸や湖沼近くの台地上に多くのＴピットが分布しており、苫小牧市・鵡川町と共通した立地を示す。

Ｔピットがこのような海岸や湖沼に面した台地上に位置するのは、越冬のために移動したり、繁殖のため山地から河岸段丘面などに降りて群集するという鹿の習性（佐藤 2000）に対応したものであろう。近代の証言であるが、石狩平野の鹿は千歳から日高地方西部で越冬し、春にまた戻るという（犬飼 1952）。大飼の引用する『札幌縣勧業課第一年報』でも「鹿は…（明治 12 年の）数年前までは…（中略）…冬間に至れば深山積雪を避けて概ね胆振・日高・十勝等の海岸に群集せしが…」と記載されており、苫小牧市・厚真町・鵡川町近辺の海岸部には、明治初期まで冬季間に多くの鹿が群集していたことが分かる。これは、豪雪を避け冬季の食料であるササを摂取するためであるという（佐藤 1991）。

一方で厚真町においては厚真川中流域に注ぐ支流に位置し早来町との境界に近い幌里４遺跡や上流域の厚幌１遺跡・上幌内モイ遺跡や、豊沢４遺跡など標高の高い地域まで広範囲にＴピットが分布

している。

更に、厚真町のＴピットは面積あたり検出数が多く、密度が高いことも特色である。試みに調査面積1000㎡あたりのＴピット出現率を挙げておいた。これは台地上の全面発掘か一部分の発掘かで数字が大きく左右されるものである。それを考慮しても厚真町の平均出現率6.72は非常に高いと言える。出現率が群を抜いて高い浜厚真３遺跡を除いても平均値は3.69で、他の町村よりも１ポイント程度高い。また、出現率が２桁の遺跡は３ヶ所あり、全て厚真町に存在している。そして、厚幌１遺跡の10.15や上幌内モイ遺跡の5.33のように、厚真川上流部でも密度が高いことが指摘できる。

このように、厚真町ではＴピットが広い範囲に分布し、その密度が濃いことが大きな特徴である。

厚真川中・上流域にＴピットが見られることは鹿の移動が海岸沿だけではなく、流域間を越えた移動があったことを示唆する。中流域ではその遺跡分布から千歳市・苫小牧市～早来町・追分町～厚真町の内陸部を横断する移動が推測される。また、厚真町の北側に隣接する夕張市の十三哩遺跡で52基、滝の上４遺跡で163基（北保協1996・97）、同じく由仁町川端遺跡・川端２遺跡で合計110基（由仁町教委1996）のＴピットが確認されている。このことから、上流域では夕張川水系と厚真川水系との間の峠越えの移動が推測される。

厚真町はこのような鹿の移動の結節点に位置しているため、細長い町のほぼ全域からＴピットが検出されるのであろう。

そして、上流域の厚幌１遺跡では胎土に石英を多く含む特徴的な土器が出土している。これは富良野市や芦別市において良く見られるもので、搬入品と考えられている（厚真町教委2004）。このことから、厚真町・厚真川流域は鹿だけでなく人・物の移動においても同様の役割を果たした地域であることを示している。

表1　胆振東部地域のＴピット検出遺跡

町村	遺跡名	Ｔピット総数	調査面積(㎡)	100㎡あたりのＴピット検出	備考	報告書・文献
厚真町	厚真１遺跡	12	5280	2.27		苫理文1986
	厚真２遺跡	8	3241	2.47		苫理文1986
	厚真３遺跡	31	6366	4.87		苫理文1990a
	厚真７遺跡	79	7185	11.00		苫理文1987
	厚真８遺跡	9	6829	1.32		苫理文1986
	厚真10遺跡	3	2707	1.11		苫理文1988
	厚真12遺跡	2	1812	1.10		苫理文1990a
	厚真13遺跡	9	3200	2.81		苫理文1992b
	共和遺跡	7	5711	1.23		苫理文1987
	鯉沼２遺跡	7	4296	1.63		厚真町教委2001
	浜厚真３遺跡	187	3804	49.16		道理文2003b-04
	厚幌１遺跡	95	9360	10.15		厚真町教委2003
	上幌内モイ遺跡	21	3942	5.33		
	幌里４遺跡	7	2692	2.60	2004年工事立会	
	鯉沼３遺跡	7	1857	3.77		本報告
	豊沢４遺跡	+			2004年試掘調査、総数不明	
	小計	484	平均値	6.72		

※浜厚真３遺跡を除く平均値 3.69

町村	遺跡名	Ｔピット総数	調査面積(㎡)	100㎡あたりのＴピット検出	備考	報告書・文献
早来町	遠浅１遺跡	2	4243	0.47		苫理文1987
	大町２遺跡	4	3640	1.10		道理文2005
	富岡３遺跡	1			試掘調査	
	安平４遺跡	4	1168	3.42	埋蔵・時代消とされる	早来町教委1976
	小計	11	平均値	1.66		

町村	遺跡名	Ｔピット総数	調査面積(㎡)	100㎡あたりのＴピット検出	備考	報告書・文献
追分町	米原１遺跡	+			試掘調査、総数不明	追分町教委2002
	米原２遺跡	+			試掘調査、総数不明	追分町教委2002
	米原３遺跡	1	7600	0.13		追分町教委2001
	米原４遺跡	9	4376	2.06		道理文2001-03a-04
	米原５遺跡	7	24000	0.29		追分町教委2002
	宮戸３遺跡	32	3600	8.89		道理文2001
	宮戸４遺跡	53	1641.0	3.23		道理文2002-03a-04
	小計	102	平均値	2.92		

町村	遺跡名	Ｔピット総数	調査面積(㎡)	100㎡あたりのＴピット検出	備考	報告書・文献
苫小牧市	美沢１遺跡	28	22300	1.26		道教委1977-78・79、道理文81
	美沢２遺跡	33	10560	3.13		道教委1978
	美沢３遺跡	28	40684	0.69		道教委1977、道理文81・89-90・91-94
	美沢４遺跡	14	23760	0.59		道理文1980
	美沢５遺跡	21	7460	2.82		道理文1980・87
	美沢10遺跡	18	10760	1.67	遺5基・市13基	道理文1987、苫理文1997
	美沢11遺跡	63	14680	4.29	遺34基・市29基	道理文1988、苫理文1993
	美沢13遺跡	4	2185	1.83		道理文1988
	美沢15遺跡	3	3600	0.83		道理文1995
	美沢東４遺跡	2	2020	0.99		苫理文1998b
	美沢東６遺跡	1	8950	0.11		苫理文1998b
	静川４遺跡	17	2300	7.39		苫理文2002c
	静川５遺跡	3	3708	0.81		苫理文1998a
	静川８遺跡	50	15660	3.19		苫理文1990a
	静川９遺跡	13	5730	2.27		苫理文1991b
	静川14遺跡	120	15609	7.69		苫理文2002a
	静川15遺跡	1	2187	0.46		苫理文2002a
	静川遺跡	41	18234	2.25	但静静川16遺跡	苫理文2002c
	静川16遺跡	2	2974	0.67		苫理文2002b
	静川19遺跡	11	2975	3.70		苫理文1995
	静川20遺跡	17	2687	6.33		苫理文1992a
	静川21遺跡	4	2554	1.57		苫理文1992a
	静川22遺跡	21	13004	1.61		苫理文2002d
	静川24遺跡	2	2974	0.67		苫理文2002b
	静川25遺跡	13	8174	1.59		苫理文2002b
	静川29遺跡	3	1938	1.55		苫理文2002b
	静川30遺跡	17	9375	1.81		苫理文2002b
	静川31遺跡	2	1094	1.83		苫理文2002b
	静川33遺跡	2	3375	0.59		苫理文2002b
	静川34遺跡	6	4713	1.27		苫理文2002b
	静川35遺跡	1	3281	0.30		苫理文2002b
	静川37遺跡	1	2330	0.43		苫理文1992b
	柏原５遺跡	6	6791	0.88		苫理文1997
	柏原16遺跡	16	3770	4.24		苫理文1992a
	柏原17遺跡	4	5007	0.80		苫理文2002c
	柏原18遺跡	16	4904	3.26		苫理文1995
	柏原19遺跡	6	2125	2.82		苫理文1992a
	柏原27遺跡	6	1797	3.34		苫理文1998a
	ニナルカ遺跡	7	7604	0.89		苫理文1998a
	バンケナイ1遺跡	1	1300	0.77	2004年工事立会	
	小計	624	平均値	2.08		

表2　出土・回収土器一覧

分　類	早期後半	前期前半	中期後半	後期初頭	合計
包含層	1	4	117	29	151

表3　出土・回収石器一覧

分　類	石鏃	石斧	敲石	擦り石	砥石	Rフレイク	Uフレイク	フレイク・チップ	礫	合計
包含層	1	6	8	1	4	6	3	66	27	122
F・C集中								4371		4371

表4　遺構規模一覧(1)　Tピット

挿図番号	図版番号	遺構名	分類	平面形	確認面	調査面規模(cm) 長軸長	調査面規模(cm) 短軸長	坑底面規模(cm) 長軸長	坑底面規模(cm) 短軸長	深さ(cm)	長軸方向	杭跡	調査面長短比	坑底面長短比
図4	図版2	TP-1	A1	溝状	Ⅶ	220	34	214	10	95	N-84° W	無	6.5	21.4
図4	図版2	TP-2	A1	溝状	Ⅶ	290	57	277	16	107	N-80° W	無	5.1	17.3
図5	—	TP-3	(A1)	溝状	Ⅴ	-	-	(22)	(15)	165	N-60° W	無	-	-
図5	図版2	TP-4	A1	溝状	Ⅵ	312	84	297	17	129	N-69° E	無	3.7	17.4
図6	図版3	TP-5	A1	溝状	Ⅵ	270	94	239	14	82	N-19° W	無	2.9	17.0
図6	図版3	TP-6	A2	溝状	Ⅵ	150	34	157	13	107	N-60° E	無	4.4	12.0
図7	図版3	TP-7	A1	溝状	Ⅵ	323	74	324	37	126	N-17° E	無	4.4	8.7

表5　遺構規模一覧(2)　焼土

挿図番号	図版番号	遺構名	平面形	調査面	調査面規模(cm) 長軸長	調査面規模(cm) 短軸長	深さ(cm)
図7	図版4	F－1	円形	Ⅵ	23	21	4

表6　遺構規模一覧(3)　フレイク・チップ集中

挿図番号	図版番号	遺構名	平面形	調査面	調査面規模(cm) 長軸長	調査面規模(cm) 短軸長	深さ(cm)
図3	図版6－12	F・C集中1	不整形	Ⅵ	-	-	-

表7　掲載土器一覧

挿図番号	図版番号	遺物番号	調査区分	遺物点数	層位	時期	型式名	備　考
図8－1	図版5－1	38	3	1	Ⅴ	早期後半	東釧路Ⅳ式	風倒木痕出土
図8－2	図版5－2	165	1	1	表採	前期前半	綱文式	
図8－3	図版5－3	134	1	1	表採	前期前半		型式名不明
図8－4	図版5－4	100	2	1	表採	中期後半	柏木川式	
図8－5	図版5－5	86	2	1	表採	中期後半	柏木川式	
図8－6	図版5－6	54	3	5	表採	中期後半	柏木川式	55・56・59・61と接合
図8－7	図版5－7	45	3	3	Ⅴ	中期後半	柏木川式	57・62と接合
図8－8	図版5－8	63	3	1	表採	中期後半	柏木川式	
図8－9	図版5－9	130	1	1	表採	中期後半	柏木川式	
図8－10	図版5－10	40	3	4	Ⅴ	中期後半	柏木川式	102・103・104と接合
図8－11	図版5－11	43	3	1	Ⅴ	中期後半	柏木川式	
図8－12	図版5－12	11	3	1	Ⅴ下	中期後半	柏木川式	
図8－13	図版5－13	127	1	1	表採	中期後半	柏木川式	
図8－14	図版5－14	128	1	1	表採	中期後半	柏木川式	
図8－15	図版5－15	129	1	1	表採	中期後半	柏木川式	

挿図番号	図版番号	遺物番号	調査区分	遺物点数	層位	時期	形式名	備　考
図8－16	図版5－16	90	2	1	表採	中期後半	柏木川式	
図8－17	図版5－17	95	2	1	表採	中期後半	柏木川式	
図8－18	図版5－18	118	1	1	表採	中期後半	柏木川式	
図8－19	図版5－19	50	3	1	V	中期後半	柏木川式	
図8－20	図版5－20	91	2	1	表採	中期後半	柏木川式	
図8－21	図版5－21	114	1	1	表採	中期後半	柏木川式	
図8－22	図版5－22	101	2	1	表採	中期後半	柏木川式	
図8－23	図版5－23	113	1	1	表採	中期後半	柏木川式	
図9－24	図版5－24	133	1	1	表採	中期後半	柏木川式	
図9－25	図版5－25	105	2	1	表採	中期後半	柏木川式	
図9－26	図版5－26	107	2	1	表採	中期後半	柏木川式	
図9－27	図版5－27	7	3	3	V	中期後半	柏木川式	
図9－28	図版5－28	111	2	2	表採	中期後半	柏木川式	遺物番号112と接合
図9－29	図版5－29	85	2	3	表採	後期初頭	余市式	
図9－30	図版5－30	76	2	1	表採	後期初頭	余市式	補修穿孔途中
図9－31	図版5－31	157	1	1	表採	後期初頭	余市式	
図9－32	図版5－32	158	1	1	表採	後期初頭	余市式	
図9－33	図版5－33	153	1	1	表採	後期初頭	余市式	

表8　掲載石器一覧

挿図番号	図版番号	遺物番号	調査区分	名称	層位	計測値(mm) 長軸	短軸	厚さ	重量(g)	材質	状態	備考
図10-1	図版6－1	198	1	石鏃	表採	(22.3)	14.8	4.2	1.16	Obs	被熱	
図10-2	図版6－2	174	2	石斧	表採	118	52	33	340.00	Sch		
図10-3	図版6－3	172	2	石斧	表採	132	45	17	139.72	Gr-Mud		
図10-4	図版6－4	30	3	石斧	VI	109	49	13	178.51	Gr-Mud		
図10-5	図版6－5	70	3	敲石	表採	102	53	14	130.15	Gr-Mud		
図10-6	図版6－6	181	2	敲石	表採	(70)	(68)	36	240.00	Gr-Mud	被熱	黒色付着物有
図10-7	図版6－7	175	2	敲石	表採	147	69	29	460.00	Sa	被熱	
図10-8	図版6－8	36	3	敲石	V	(145)	84	27	520.00	Gni		
図10-9	図版6－9	178	2	擦り石	表採	(84)	69	53	360.00	Sa	被熱	
図10-10	図版6－10	179	2	砥石	表採	86	75	22	130.35	Tu-Sa		
図10-11	図版6－11	180	2	礫	表採	(104)	(96)	(68)	800.00	Gni		黒色付着物有

調査区分　1:4月立会　2:5月土砂移動立会　3:7月立会

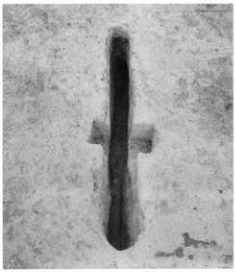
黒曜石:Obs 片岩:Sch 緑色泥岩:Gr-Mud　片麻岩:Gni　砂岩:Sa 凝灰質砂岩:Tu-Sa

調査前　近景　(SW→)

作業状況　(SW→)

写真図版 2

TP-1 セクション (W→)



TP-1 完掘 (W→)

TP-2 セクション (W→)

TP-2 完掘 (W→)

TP-4 セクション (SW→)

TP-4 完掘 (SW→)

TP-5 セクション

TP-5 完掘 (N→)

TP-6(右)・7(左)検出 (SW→)

TP-6 セクション (NE→)

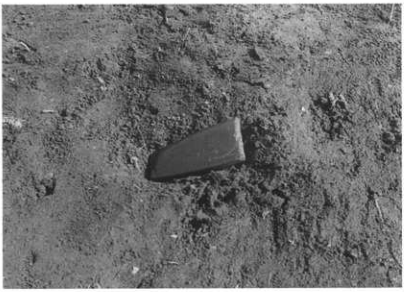
TP-7 セクション (N→)

TP-6(奥)・7(前)完掘 (N→)

写真図版 4

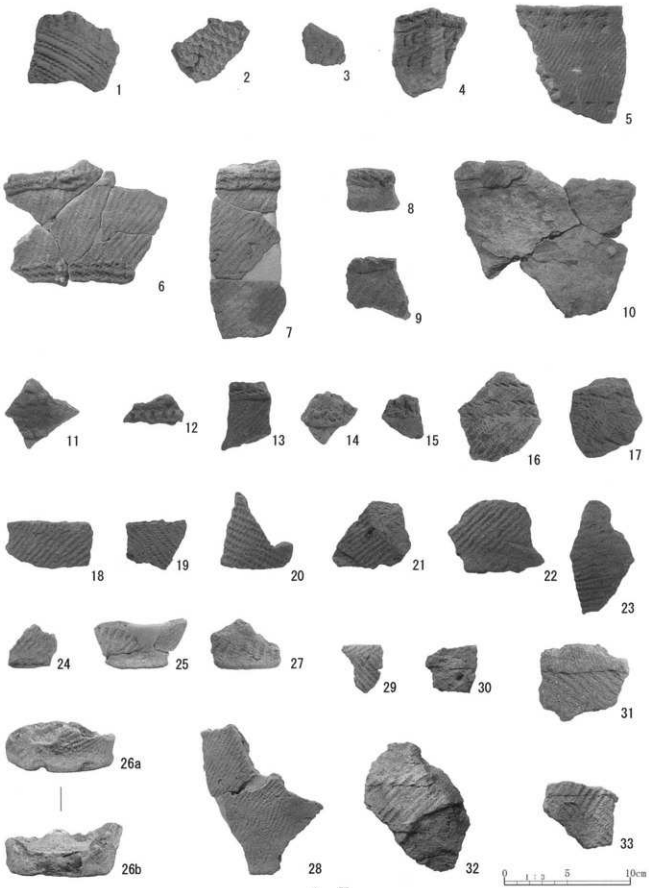
F-1 検出 (S→)

F-1 セクション (S→)



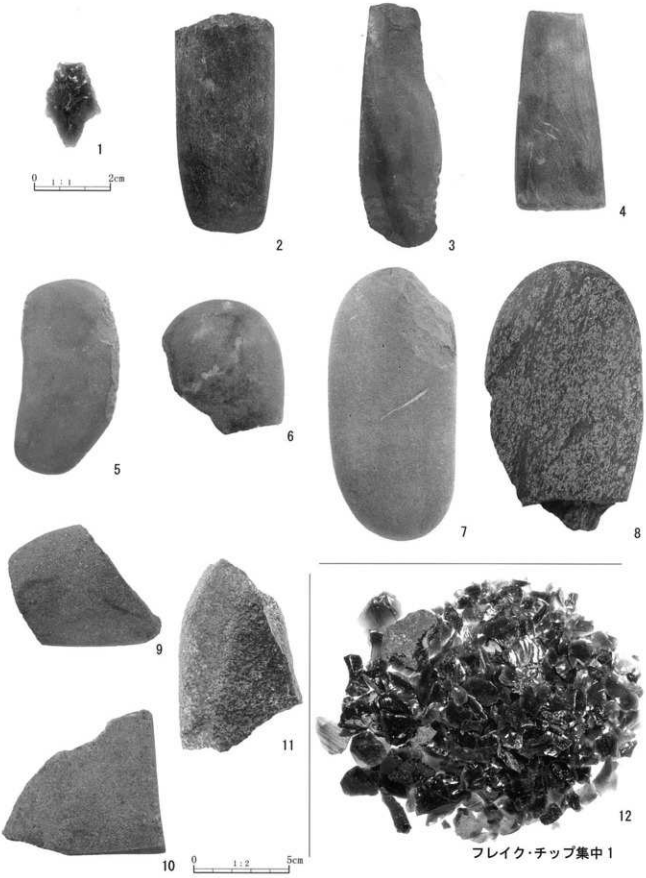
VI層　遺物出土状況（石斧）

調査終了状況近景 (SE→)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
27
29
30
31
26a
26b
28
32
33
0
1:2
5
10cm

土　器

写真図版 6



フレイク・チップ集中 1

石 器

参考文献

厚真町教育委員会 2001『豊川１遺跡』

厚真町教育委員会 2001『鯉沼２遺跡』

厚真町教育委員会 2003『厚幌１遺跡』

大飼哲夫 1952「北海道の鹿とその興亡」『北方文化研究報告』第七輯

大泰司統 2002「切り合うＴピット」『北海道考古学』第 38 輯

財団法人北海道埋蔵文化財センター1980『フレペツ遺跡群』

財団法人北海道埋蔵文化財センター1981『美沢川流域の遺跡群Ⅳ』北埋３

財団法人北海道埋蔵文化財センター1987『フレペツ遺跡群Ⅱ・ペンケナイ川流域の遺跡群Ⅰ』北埋 35

財団法人北海道埋蔵文化財センター1988『美沢川流域の遺跡群ＸⅠ・ペンケナイ川流域の遺跡群Ⅱ』北埋 44

財団法人北海道埋蔵文化財センター1989『美沢川流域の遺跡群ＸⅡ』北埋 58

財団法人北海道埋蔵文化財センター1990『美沢川流域の遺跡群ＸⅢ』北埋 62

財団法人北海道埋蔵文化財センター1991『美沢川流域の遺跡群ＸⅣ』北埋 69

財団法人北海道埋蔵文化財センター1994『美沢川流域の遺跡群ＸⅦ』北埋 94

財団法人北海道埋蔵文化財センター1995『ペンケナイ川流域の遺跡群Ⅲ』北埋 95

財団法人北海道埋蔵文化財センター2001『鵡川町浜米原３・宮戸３・米原４遺跡』北埋 153

財団法人北海道埋蔵文化財センター2002『鵡川町宮戸４遺跡』北埋 168

財団法人北海道埋蔵文化財センター2003a『鵡川町浜米原４遺跡（２）・宮戸４遺跡（２）』北埋 185

財団法人北海道埋蔵文化財センター2003b『厚真町浜厚真３遺跡』北埋 186

財団法人北海道埋蔵文化財センター2004『鵡川町浜米原４遺跡（３）・宮戸４遺跡（３）』北埋 202

財団法人北道埋蔵文化財センター2005『調査年報』17

佐藤孝則 1991「開拓前の十勝におけるエゾシカの季節的移動」『十勝考古学とともに』

佐藤宏之 2000『北方狩猟民の民族考古学』

千葉徳爾 1975『狩猟伝承』

苫小牧市埋蔵文化財センター1986『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』

苫小牧市埋蔵文化財センター1987『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』

苫小牧市埋蔵文化財センター1990a『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』

苫小牧市埋蔵文化財センター1990b『静川９遺跡』

苫小牧市埋蔵文化財センター1992a『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』

苫小牧市埋蔵文化財センター1992b『静川 37 遺跡』

苫小牧市埋蔵文化財センター1993『美沢 11 遺跡』

苫小牧市埋蔵文化財センター1995『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ』

苫小牧市埋蔵文化財センター1996『美沢 10 遺跡』

苫小牧市埋蔵文化財センター1997『柏原５遺跡』

苫小牧市埋蔵文化財センター1998a『柏原 27・ニナルカ・静川５・６遺跡』

苫小牧市埋蔵文化財センター1998b『美沢東遺跡群』

苫小牧市埋蔵文化財センター2002a『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅵ』

苫小牧市埋蔵文化財センター2002b『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅶ』

苫小牧市埋蔵文化財センター2002c『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅷ』

苫小牧市埋蔵文化財センター2002d『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅸ』

苫小牧市埋蔵文化財センター2002e『苫小牧東部工業地帯の遺跡群X』
早来町教育委員会 1976『あびら』
北海道教育委員会 1977『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』
北海道教育委員会 1978『美沢川流域の遺跡群Ⅱ』
北海道教育委員会 1979『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』
北海道文化財保護協会 1996『夕張市十三哩遺跡・滝の上4遺跡』
北海道文化財保護協会 1997『夕張市十三哩遺跡(2)・滝の上4遺跡(2)』
鵡川町教育委員会 2001『米原3遺跡』
鵡川町教育委員会 2002『米原5遺跡』
森田知忠・遠藤香澄 1984「Tピット論」『北海道の研究1』
由仁町教育委員会 1996『川端遺跡・川端2遺跡』

報 告 書 抄 録

ふりがな	あつまちょう　こいぬまさんいせき
書　名	厚真町　鯉沼3遺跡
副 書 名	農地造成に伴う工事立会調査報告書
巻　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	藤原秀樹・奈良智法
編集機関	厚真町教育委員会
所 在 地	〒059－1601 北海道勇払郡厚真町京町165－1　℡(0145)－27－2321
発行年月日	西暦　2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査 期間	調査 面積	調査 原因
こいぬまさんいせき 鯉沼3遺跡	北海道 勇払郡 厚真町　字 鯉沼108番地 1・4	01581	J-11-85	42度 38分 11秒	141度 53分 1秒	20040712 ～ 20040716	1857 ㎡	農地 造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鯉沼3遺跡	溝穴 遺構	縄文時代 早期 前期 中期 後期	Tピット 7 焼土 1 フレイク・チップ集中 1	土器 151点 石器 4493点	沢地形部分にまとまるTピット。 縄文時代中期、柏木川式が主体。

厚真町　鯉沼３遺跡
－農地造成に伴う工事立会調査報告書－

発　行　日　　平成17年3月31日
編集・発行　　厚真町教育委員会
〒059-1601　北海道勇払郡厚真町京町165番地1
電話　（０１４５）２７－２３２１（代）
印刷　苫小牧印刷工業株式会社
苫小牧市小糸井町１丁目３番19号